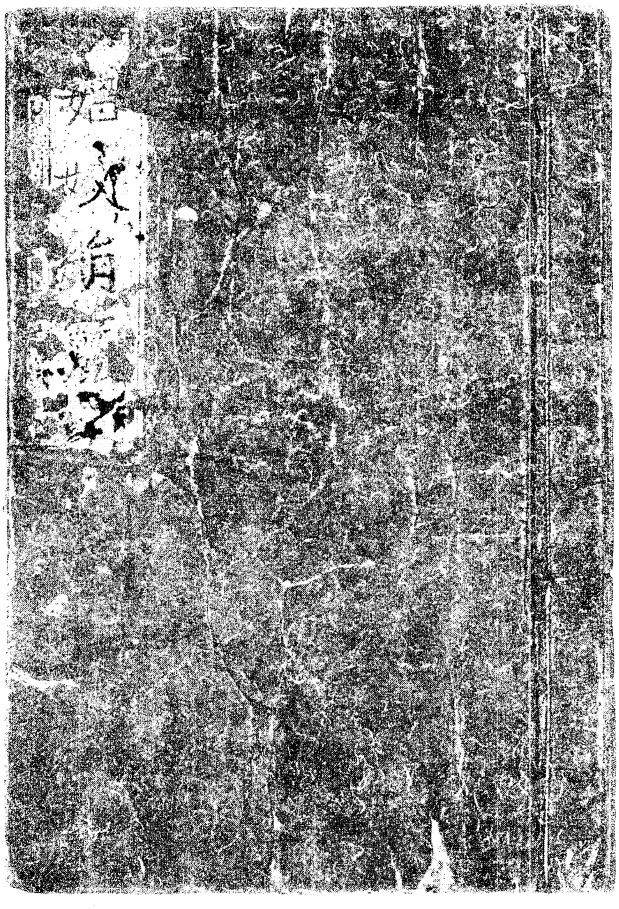


表紙	三寸七分	二寸五分
本文枠	三寸	四寸

西江月

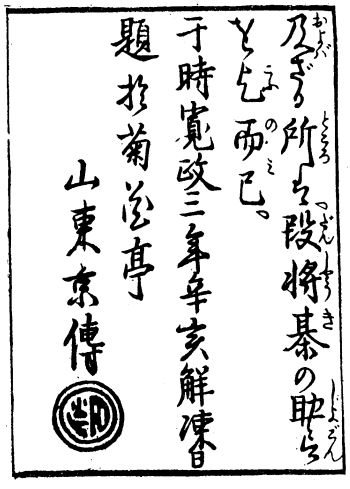
歌楼妓館ヲ戀フコト莫レ。美色ト嬌聲トヲ貪ルヲ休メヨ、分明ニ是箇陷人坑。歎ズ可シ愚人省ラズ。樂處愁怨ヲ生ジ易シ。笑中眞ニ刀兵有リ。等閒失脚シテ。他ノ門ニ入レバ。便チ是蝦蟆ノ井ニ落ルガゴトクナラン。

柳浪館主人

手段逼物娼妓絹籠自序

煙花を將棊の局面に設娼妓の駒下踏の往來を觀に茶店に客を待棊子あり籬で私夫に間棊子あり。大通直して飛車先の如く素痴曲て角道に似たり。初會の席上に初王手あり。馴染の閨中に入王あり。色は金銀に有て思案になし。堅心の石田も崩れ櫓に圍と

も忽破る。可恐。巧計のために都逼とならんとを。桂馬は誇て歩兵の餌となり。香車の慮なきは謬自。或は飛車手王手の義理に纏られ。或は後王手の借金に苦手のなき時は端の歩をつくづく苦にする茶店の借。臨期で二歩をつかひ。留守をつかふといへども。借金乞の爲に逃道を失ひ。遂に雪隱逼と成



あり。嫖客と將棊園は一手先はみへざるべし。則娼妓絹麓を作る。予がへぼ象戯の及ざる所は。段將棊の助言を乞而已。

于時寛政三年辛亥解凍日題於菊花亭

山東京傳㊞

客はしごを二だん上る女郎てうづのかほにてよこにゆく藝車を一まいうつ女郎二けんめのざしきへにげるひらいて大手をとる又一ツけんにげるあたまから銀とうつ女郎ふそくにおもひとらずにわきへよる又金と打女郎がそこで死ぬ

右　惣傾城

目録

第一回

義理と情との二タ方に思ひ間碁子もなりかね梅川が
飛車を王に

第二回

はつひたちうして二歩殘る亀屋大尽を清八歩三シ
びつくりでもつまりかね糸の上

第三回

張成つて客もかまくらぶど横ゆくハ女帝
の實と卵の角乃

手段誥物娼妓絹籬

山東京傳著

○第一回

義理と情愛二タ乃ハ乃碁子もの
ぬ梅川が飛車を王を
□汐糖屋の丁兒甘紀をきゝ〻ゞ鰻鱺屋
の横兒愛をこの頃ゞ李白一斗詩百篇
といふ秋一度れも歛菱ゞ居風呂を

たてゝ。三日ばかり入ておいたら。まつひら御免といふはしれた事。花の下にて死たひといふた西行も。飛鳥山に居つゞけをさせたらば。かならず欠伸をするなるべし。されば久米仙人も女湯の番人にしたら。素餡に通をもうしなふまじく。弓削某とても女護島へながしたら。たちまちおいとま申べし。どれほどに美麗でも朝夕眼前にぶらついて居ては。このましからず。女郎買も命から一番目の大切な金銀を出し。其くせゆきにくきところを。都合と工面で偃茹にした首尾をもとめ。主親の四つの眼をはじめとして。人目をしのびて通へばこそ。おもしろくもあつたもの。一外買の足るをしらず。心のまゝに樽酒のたのしみせんと。女郎の勝ぐらに。家藏をうちこんで贖身をし。渾家にしたところが三日もたゝず。鼻につくは世間にいくらもあるかたなり。雙が岡のしれものが。花はさかりに。月はくまなきをのみ見るものかはといひしも。まとに如在なき法師也。こゝをもつて推ば。女色の迷ひもはれぬべし。嗚呼。さうじやとひとり悟顔に。口ひろきとはいふものゝ。捨がたきはとかく此まよひの一ッにて。上ミは一人よりして。下モは萬人講の講頭。兎の毛のポットセの髭に。天乍で出やうといふ岩夫さへも。むかしおもへば信田の森の。うらの朽家でちよろまかした徒にて。かの川柳が選に。母の名は親父の腕にしなびて居。とは頗掣なり。わつちや。こういふかなしいとが。おざんすと酸鼻ば。酒呑童子と腕をしもしかねまじき。丈夫の混槃像の二王みるやうに。己に似あはずうちしほれて。ともに涙をこぼすをみれば。實に女色は斷骨の斧。迷心の毒にきはまりたり。佛祖三經に。浮屠子の曰。愛欲は色よりはなはだしきはなしと。宋の景之元が美色のために命を沒するをもつてみれば。忠に死と甚輕しと。かたく出かけしも理なり。賢を賢として色にかへよとは。則此場所ぞかし。又媚は比封狐。機は深窮虎などゝ。明人もいふて置れば。女郎に身を謬と。中華の人情もたがふとなく。夏の溫石と女郎の心は。つめたいがちのものなれば。いづれゆだんはなるべからず。其又戀といふ川上をたづぬれば。僅方寸にたらざるなれど。むかしから此へ。國を陷城ををとし。家をおとし。身をおとす者。倭漢にかぞへつくしかたく。周室を陷したる褒姒がも。波錢一ぽんおとしたる鳥焼川岸のも。ついに塡たうはさをきかず。清の曼翁が碧海の迷津じやといふたもうそばなし。むかし混沌未分のとき。耳か鼻からか。

子をうませ。社稷宗廟をつがせ。こんな　をばあけぬ相談にきはめたら。こふいふ惑ひもあるまいもの。何につけても邪魔な厚口。怖の風ぬ　。あやしむべく。おそるべきの妖なり。

○爰にむかし。大坂新町の廓ちかきにいと閑なる所あり。世を捨人のかくれ笠。地名を箕輪とよびなれしも。簑にとなえの通ずれば。ぬれのちかきにあるゆへならん。箕輪の寮とて。人もしりあたりに目だちし。一トかまへは。新町の女郎屋。槌屋治右衛門が別業なり。抱の女郎梅川といふおいらん。ぶら〳〵と煩ひければ。保養のためにはしづかなる。此別荘がしかるべしと。番頭新造の梅春も。看病のためもろともに。しばらくこゝに遷居る。ころしも秋の露さむく。菊はたばこにむしられて。尾花は炭の俵につくられ。庭の草木もうつろひて。いとほそく啼すゞ虫の。音をきくにさへ苦海の身は。夜みせしらする鈴の音かと。耳おどろかすも理なり。折からそぼふる霧しぐれ。遠寺の鐘の音もしめり。いとゞあはれの秉燭ごろ。むめ川はかの福清がいつしにひとしく。幽霊の濱かせにあふたるやうにおとろへて。臥具に其身をもたれゐる。そばには。新ざうむめ春が。氣をなぐさめの本よみさし。モシおゐらんのとこへ。心持はどうでおざんすへ。ァィけふはいつそようおざんす。ヲ、それではモウ。だん〳〵とよくおなん〳〵すでおざりいしやう。風のあたらぬやうになさりんし。ドレ藥をあたためて上申ンしやう。と尻輕にとし下なれど。姉とよぶおいらん大じの心根は。妹女郎のかゞみなり。梅川は泪くみ。ホンニ何から何まで心づけ。しんみもをよばぬぬしの介抱。死でもわすれはいたしんせんにへ。なんのァァばからしふおざりいす。灸すへの文句のとをり。世話になるのをあねといひ。憂をかたるを妹と。名をよびかはすながれの身は。せはになつたり。又したり。互のとでおざりんすもの。そんなとに心づかひをなさりんすな。サァ藥をお上んなんしへと。藥ちやわんをさし出せば。むめ川は手にうけて。それにつけても苦勞になるは。忠兵衛さんの妻でおざんす。ヲ、それも苦勞になさりいすな。おまへさんの病氣さへよくなれば。わたしがどふとも都合して。かけもすまして上申。内證の手まへもとりつくろひ。二階のあくやうにして上ゲ申ンす。縁といふものはあぢなもの。忠兵衛さんの初に來なんしたは。去ゝ年の三月。さくらの初日でおざんしたね。ァィぬしはよく覺へて御いでなんす。ァィサわたくしは。其

時のことを忘れはいたしいせん。しかも其晩忠兵衛さんの形は。羽織も小袖も。黒八丈。ヲ、それ／＼。下着は對いの結城縞。持物や何やかやも。いつそ意氣でおざんした。わたしも其晩。まんざらでないと思ひゝしたから。床へも早くゆき。なんぞいひたいと思つても。モシへほれた男にや。ものゝいひにくひものでおざんすねへ。それはたれしもさうでおざんす。其夜はしかもわたくしが。次の間に寐てゐんして。よく聞ておりんした。忠兵衛さんのいひなんすニハ。梅さん。初から此やうなといふでもねへが。此間中からお前を仕廻によこしでも。御全盛といふもので。ついによいばんがなく。初名代で來るも。何か己ぼれらしいから。じれつたく思てゐやしたが。今夜かうしておお目にかゝるといふは。わつちやァ夢かとおもひやす。トまづをつな手を出しなんした。ホンニ忠兵衛さんの癖が。いつそぬしは上手だよ。それから。わたしがかういゝした。わたしらがやうなはかない女郎でも。マアうそにもそんなことを。いつておくんなんすは。うれしふおざんすと。よくいふものでおざりゐすが。わたしやマアうれしくおざんせん。まんざらでないと思ふ心から。ひよつとさうおつせへすを。ほんにしてとやかう思ひしても。これぎりでお出なんせん時は。大たい罪じやおざんせんにへ。それよりはやつぱり。正直にをれはわきに馴染があるが。今夜はそこがわるいゆへ。しやうとなく夜をあかすまでに來たのだから。必ずとやかうおもふても。むだゞほどに思ひきれ。と言つておくんなんすが。わたくしは嬉しふおざんす。トわたしが申ッしたし。ァィサそれから又。忠兵衛さんがいひなんすには。フウおめへはむごひことをいふものだ。此ごろうち。茶屋からたび／＼聞によこした事も。てへげへ知つてもゐるだらうに。それを脇へこかして。そんなことをいふのは。フウ聞へた。思ひきれといふ謎だらう。こがれ死をするまでも。さういはれてはは是非がねへと。一ッすねなんした。ホンニさうでおざんした。それからわたしも面白なつて來て。ヲヤじれつてへ。どうしやうのう。さう思ひんすくらゐなら。こんなに氣はもみんせん。何をいふのも。フウ初會だといふのか。こつちは久しくとやかうと思つて居た心からは。初の裏のと思ひはしねへ。したがこつちばかりさう思つて。こんな嫌らしい事いふも。つもられる所がはづかしい。モウ何もいひやすめへ。トあちら向いて寢なんしたゆへ。やう／＼あやまつて。こつちを向かせ。モシマァ聞ておくんなんし。おまへさん

も人に知られたお方なれば。今までお近付でこそなけれ。茶屋でもたび〳〵お見かけ申。とうから知つておりんすもの。初會の心じやおざんせん。おまへさんさへほんに來ておくんなんすなら。わたしやシツかくごをしてよびとげ申心でおざんす。ハテおれもさうなれば浮氣をのけて眞ッの事。ソリヤほんにかへ。ヲ、しれた事。こんな美しいしやつつらを。なんの持ずともいゝとにこんなにおれを迷はせる。ト煙管でたゝく眞似をしなんした。はづかしいが其ときは眞にうれしくおもひんした。それがやつぱり惡緣でおざんしたと。ほれた男は噂にしても。ふさぐが女郎の習にて。梅川は梅春とかけ合の。此はなしにのりが來て。すぎこし方を思ひ出し。我身にかゝる夜具を出れば。梅春はそばから氣をつけ引かくる。ほどなく四ツの鐘なれば。氣くたびれてか梅川は。其まゝそこにすや〳〵と寢いりつけば。むめはるが夜具かいつくろい屏風ひきよせ。見かけてをきし淨瑠璃本一枚あくれば。秋のかせ障子のひまより方燈の火をさつとふきけす。折から封壇のあたりと思れて。迷子の〳〵の久太郎ヤイ。トヽトンチャン〳〵廡へをとす雨の音サラ〳〵〳〵〳〵。

第二回

つかひはたして二歩のこる龜屋忠兵衞は歩三ッ兵でもつまらぬ身の上□潮光也浪速の色をせきとめて。黃金でかけし木擁は。ながれの里の浮しづみ。贖身あれば梳籠あり。日に新にして日〻にあらたなる。町の夜みせの賑ひは。兩かはにてひきたつるチャンラ〳〵ゴシ〳〵〳〵。地まはり よみせのすがいき。さいもん小ぐりへいたはしやてるての姫。とある所へ立よりて。口說どこをあはれなり。ゴれレン〳〵〇清水のだん。いめへましい。下踏のはなをゝふんぎつた。コレ鉄や。これから西川岸をそゝるべえ。きを付ろ。まがりつとに水ッたまりがあるせへ。まだ乾きやァしめへ。かぶろ かうしへ頭を おつつけ。山本屋ェ人ッ〳〵。こなたにはす けんの徒。里町 のぞ見。コウ見さつせへ。アノ如意輪觀音が 箔しろのこんりうに出たといふ身で。ほうづへをして居る女郎は。扇風が一度かつて揮られた女郎だ。花曉 フウなんたるひつてんらしい女郎だのう。茶づけ店のならづけといふうすひ櫛に。水膠をみるやうな笄をさしてゐるせへ。ふめねへあたまだ。コウあけぼのへ脇差も一しよに。預けてくりやァよかつたのう。ごうせへ邪魔になると。かうしの下にねてゐた犬。尾をふまれて。へきやん〳〵。花 おきやァがれ。とんだ氣のきかねへ犬だ。里 犬をふんだも今道心じやァねへか。花 わりい〳〵。里 こつちらの初だけのさひといふ色の着

ものをきて。何かふさいで居る女郎は。にげそくなつて判人の所へさがつたといふつらだ。花うさァねへ。アレあくびをすらァ。大キな口だせ。里かけ硯にもたれかゝつてゐる女郎は。素人絵の濱むら屋だ。ト花魁はやとなりの格子を。のぞいてゐるともしらず。やつばりそばにいると思ひ。むしやにしやれる。こつちらの再興めへの二王の腕といふ色の着物をきてゐるしんは。茄子のさしみをこせへるとつて。鍋のふたでおつべしたといふつらだのう。トいへども。挨拶なきゆへ。ふりむいてみれば知らぬ人。ホイこいつァ大わらひだ。トゆきすぐる。〔自註ニ曰。此里丁花魁は。いづれも助六がまたぐらをくゞらふといふともがらなり。これを唐音にて門走といふ。長崎丸山にて十年ぶりといふ。實はすでをふつてもどるゆへ。素手振といふあやまりなるよし。往古吉原にては。とりんぼうと云。今は素見といふ。そこで女郎はすかんといふか。〇扨此むかふより來る二人の客はやかたものと見侍客見なへ。どれもうつくしい者でござるの。今一人なるほど。きれいなものじや。こう見た所は御年始に奥へ出たやうでござる。客いかさま。アノまん中に柏の定紋を付てをる女郎は。よい器量ではござらぬか。金田氏の内室に少しにてをる。客なるほど。イヤこちらの黒い衣裳もよくござる。客モノ是は何屋といふのじや。茶屋男つきそでのうちから。看板提灯をさげて。あとの方にゐたるが。ハイこれは此新町で。一二をあらそふ楼屋と申のでござります。なんならこゝにおきめなされませ。さうこう致すうち。そろ〳〵よい女郎衆はあがります。客イヤもそつと。他を見物いたさう。トこいつはなはだ氣が多し。またすがゝきの音。チャンラ〳〵〳〵。かゝる折しも。表のかなじみの亀屋忠兵衛。地まはりにけんくわをしかけられた忠兵衛むなぐらを取れたる手をとつて。コリヤアどふするのだ。トふりはなす。きをひ定あんまりうぬがつらが大きいから。此定さまがむしが。がつてんしねへはへ。闘鉄うぬがやうな野郎が。此土地へへりこまるから。おいらが格子へ立ても。すのこんにやくのとやかましい。崑崙兒の灸点をみるやうに。自ィつらをはりまげてやるべへ。むねつくそのわるい猿唐人じやァねへか。定へたに歯箱をならしやァがると。こうだぞ。ト大黒のつらへ白しんちゃのびやうをうつた。黒塗の丸げたをぬいてふりあぐる。忠其手をしつかとりて。コリヤアわいらァ誰にか頼れたなァ。ヘコロリンシャン。たそや。此夜中にさいたる門をたゝくは。たゝくともよもあけじ。宵のやくそくなければ。トむかふの二かいの琴きこゆる。又鶴すきをみて。忠にぶつてかゝる。忠しづんで身をひねる鶴はづみにて天水桶へころびかゝる。すかさず定又ぶつてかゝる。忠ひらいて横にはらふ。定よろ〳〵としてどぶへ片足ふみこむ。琴へ七尺の屏風もをどらばなどか越ざらん。定鶴兩ほうより一度になぐらをむづとる。琴へ羅綾のたもとも。ひかばなどかきれざらん。所へ人〳〵出やひ引わくる。とうど二かいの琴きれる。〇扨此つちやの楼上には。おもてざしきのおいらんむめ川。きやく人あつてもはやほん間にとこおさまつてゐる。夾の間には書

頭新ざうむめ奉。しかみ火鉄へどびんをかけ。わる紙であをいでいる。[梅奉]じれつてへ火だのう。なせおこらねへのう。ト折から廊下にて新造。[浮浪]ほんにかへ。はりさけすね。ト何かいひながら。かけて此さしきへ来り。むめはるさんへ。御つぎの物をおあんなんしたか。[梅ゥ]おかたじけ。のちに喰ふと思つてしまつておいたよ。きやく人はおめへどうした。[浮]あいッ聞ておくんなんしへ。憎くつてなりとせん。あれからとう〳〵かけだして參りした。茶屋からも人をよこしいしたけれども。わたくしやァかまいせん。ひさしいもんでおざりいきァな。[梅]おめへもほんに。あれはど惚れられたがつているものを。モウちつと惚れてやればいゝ。[浮]おめへさんさうおつせへすけれ共。わたくしだつても。そねへにやァ惚れられんせんものを。ト此ざしきのふりしん。[きよ舟]あの人さんもばからしい。よくおかけ出しなんすねへ。[浮]ホンニ いつでもせはをやかせる客人でおざりィすよ。ト長いひながらをなでゝ。[梅]コレ戀路や。今いひ付たとをきり〳〵しねへか。何をして居るのだ。[禿]アイ 今こゝに。[梅]久しいもんだ。早くいかねへか。ト折ふし。本ゝ間のびやうぶのうちにて手をたゝく。[梅]アレよばつしやる。マア あすこへゆきや。[禿]アイ。ト此用をたす。廊下にふりしんのこえで。[浮]なみさん〳〵。ちよつとお出なんしッサ。おいらんでサ。[浮]アイ今參りィしやう。ト立つ所へ来るきやく。下靴のまゝおびをじたなくにむすび。今とこから出たといふなり。ふところ手してはいり口から。[柳蝶]浮なみさん。でへぶそは〳〵するの。格子へ地いろでもきたか。[浮]よしておくんなんし。わたくしらァ色と土用干はついにしたことがおつせん。いろといふものはどんなものだへ。どこの井戸からわきんすねへ。[柳]井戸からはわかねへが。その下からわく虫よ。こいつにひよつとたかられると。女郎衆もしめへだ。まづ二朱壹歩の小金から喰ひはじめて。櫛笄から着物をくひ。それから髪をくひきり。小指をくひ。だん〳〵臓腑へくひこんで。いろ〳〵な氣をださせ。とう〳〵命をとりおはんぬ。なんぼうおそろしき物がたりにて候。さこれをなづけて。死ゝ心中の虫といふはな。こいつをよけるにやァ。鍋屋のうは氣うせぐすりといふがある。おめへがたもちつと用心にしめなせへ。[梅]ぬしも女郎衆にほれられなんすから。其虫の部だね。[柳]おきやァがれ。[みな]ヲホ、、、、、。ト笑ふ。[浮]たんとおしやべんなんし。ト出てゆく。[梅]ぬしやァ。なせそねへに廊下鳶をしなんすへ。色でもできなんしたかへ。今おつせへした虫にでもなるきかへ。[柳]爰の二階ひろしといへど。[梅]ぬしたちの相手になるやうな。手のある女郎衆はねへといひなんすのかへ。[柳]あるといふとさ。マア茶

ア一ッくんねへ。梅ぬしやァ口果報があんなすよ。今丁ど茶を入とした。柳くふものなら口がほうだが。こりやァ呑ものだから咽がほうだ。梅わりいしやれだね。コレ小夜舟さん。ついであげ申シな。舟アイ。ト火鉢のかげにあつた茶碗を實のからを。あんどうのだいへすて。茶をついで出す。柳こいつァいゝ茶だ。コウそこの紙につゝんだ物はなんだ。トあけてみれば。火鉢の灰のかたまりをひろい出しておいたの。おきやアかれ。おらァ又豆こりんかと思つた。舟わらひながら。トいふ所へか。禿山本屋じやァ十二せんのはきれたし申シますから。わきでとつて參りした。トのりの入ハまいつきを出す。梅馬鹿らしい。この子ァ。柳嫖さんだからいゝけども。あんまり遠慮がねへぞよ。ちつと氣をつけや。柳氣をつけずともいゝぞよ。やつぱりこんだからおいらんノ客人のめへでもかまはず。此笄は二百はかしィせん。なまつげのかう／＼は。たつた二ッはうつてよこしいせん。と正直にいやョ。梅馬鹿らしふおざりいすはな。おぶしやれなんすな。わたくしらァそんなけびはしいせん。柳それでも。いろ男の所へさつまいもの。無心をいつてやつたさうだ。梅うそうおつきなんし。だがさう申しいした。トいふ所へきたるへやもち女郎。左の袖で口をかくし。右の手にみすがみをもちそへてつまをとる。なりは紫のいたじめのむくに。心は茶縮緬のしごき。べちやアねへ。すみ彩色のにしきゑといふ衣裳づけ。かたあたりを一ッふるわせる。ませがきヨ、つめてへ。ヲヤ柳嫖さん。でへぶましておざんすね。ト火ばちのそばへつくばひしが。おや氣味のわりい。たれぞすはつておりィしたかへ。梅なせへ。ませいつそ疊があつたけへよ。トつめで二ッ三ッはじいてすはる。柳ませがきさん。かういつちやァ。それ鏡らしいか。ごうせへにきれゐだせ。そして愛敬がこぼれるやうだ。必ずそこらへこぼしてくんなさんな。ひよつとふんづけると氣がもめらァ。おめへの紋はおつなもんだの。枝巴か。きついものをゑだつきにしたの。雷の鉢植じやァあるめへし。ゑだがしはのゑだき、ようなどにならひて。あやまりて。まゝゑたたかのはゑだきつこう。ゑだ七ほうなどを紋に付るなり。こゝが色男の情なるべし。柳むくの裾摸様もこいつァあんじだ。あやすきに二葉葵か。べちやァねへ。芝居の木戸が蓮池へ身をなげたといふもやうだ。ませそんなにわる口をおつせへすと。くらァしんすにへ。トはこいたの茶焙をふり上る。柳コウあやまつた。おりよヲば野郎のまりだと思ふさうだ。おつとまちげへ。羽根だとおもふさうだ。梅ヲホ、、、、トたばこをすい付て出シ。ぬしやァ今夜は誰さんだへ。松さんかへ。ませいゝへ。何此ぢうの松屋からまいりしたらうさ。梅色おとこじやァねへかへ。ませ後生でおざりィす。

甘露梅のすくなつたといふいろの。ぢいさんでおざりィすよ。【極】イヤごうせいにむつかしくたとへるせ。晦日ばきの鼠いらずじやァあるめへし。コウトもちつとなんぞ。惡くいひてへもんだ。トそこをみまはし。梅さん。此びやうぶの虎は。女郎衆の座しきにやァ目出たくねへせ。【極】なせへ。それでもとらは。千里もちつとのうちにあるくと申ンすから。待人がさう早く來るとよふおざんす。【柳】それはさうだが。又千里もどるといふからわりい。【極】あんまり歸らねへと。うちをしくじりんすは。【柳】なるほど。こいつァさうだの。したが此虎のつくばつてかたをいからして居る所は。なんの事はねへ。たばこやの賃粉切といふ身だ。此むだは。けいせいにはおちぬゆへ。だれもわらはず。梅さん。笄をちつとかしな。【極】ぬいていゝ年をして。酒中花をからみつけてをくこともねへ。おとなげねへ。トみゝのあかを取。【極】馬鹿らしひ。まだとしがいきんせんは。【柳】としがいかねへも氣がつゑへ。おめへとしで三ンど斗。琉球人にあふだらう。【極】どうしんしたとへ。ト是もあまりおちがこず。【柳】これさ。ませがきさん。さはんなさんな。耳があぶねへ。ト此ちあんどうの傍に。ふりしんさよ舟いねむつてゐる。【柳】みねへ。小夜舟さんがはじめた。ソレごらうじろ。釜ひつくりかへつて。たことかはる。傘ひつくりかへつて介六とかはる。八文ノ丶。【ませ】【極】ヲホ、、、、。【舟】此こへめをさまし。目をこする。【柳】さよ舟さんどうだ。氣がついたか。トいふところへ。朝くとり上られる。【柳】【歴】らしきせのふり袖をきたしんざう。かをかけて來て。モシへ柳嫖さんに。はなが出來たから。おいらんがきて。おまんまをおあんなんしッサ。ヲ、せつねへ。トためいきをつく。【柳】がうせへに鼻息のあらひ子だせ。箔屋のうちへはおかれねへ。なんぞうめへものがあるか。【初】いけへとおざんす。【柳】先へいきねへ。今いかふ。【初】サァ早く御出なんし。そしてね。百代さんがね。此劔をごらうじいしとサ。トしんぞうの劔とみへ。わるかみへ書た。あく筆の劔をいだす。これ夜みせのたいくつのまゝのわざくれも。【柳】とつてひらフウなんだ○一寸申上る。りうひやうづらに。こんやはよくきた。なせ御やくそくのまげいはへのきれをもつてこねへ。にくいやつだ。御うらみにぞんじる。○ぶしやれな文句だ。サァよめねへ。沈金ぼりの唐草をみるやうな字の劔だ。【初】マァあつちへいつてお讀なんし。トむりに引ずつてゆく。此客べしでほれられる氣もなく。又きいた風のともがらにもあらず。たゞむだ口をきいて。二階中で心やすたてをされ。所ゞのざしきへあそびにゆくを。たのしみに來るきやくなり。此風の客まゝあるものなり。【ませ】柳嫖さんのむだがおかしくつて。遊すぎんした。まいりしやう。【極】モウ一ッぷくおあんなんしな。【ませ】又いつて參りしやう。ト出てゆく。あとには。【極】さよ舟さん。硯箱を出してくんな。ト劔を書かゝる。折か

らひけ四ツのひやうし木をうつ。廊下にて。

[かぶろまはし]子ども衆寝なさへよ／＼／＼。ト二階中ふれる○これなかゐの役にて。かぶろ一しきの世話をやく。これをかぶろまはしといふなり。○下には簾をおろす音のきこへ。夜鄰ひければ。おちやを挽た妓は。大赦にあふた罪人をみるやうなこゝちにて。欠をし伸をしながら。梯ばた／＼二かいへ上り。わが局〻へ散乱する。かつかちめへでおまんまを喰ふ雛姫は。恰も飢たる虎のごく。器にのこりし魚の骨は。化野に異ならず。とやかくするうち音もなく。右も左もしづまりて。此所に海誓山盟あれば。彼所に頤鸞倒鳳ありて。襄王が夢をむすぶときなりけり○亀屋忠兵衛は梅川と深くなじみて。金にはつまれど身はつまらず。あげ代がたゝまりて。此二かいかとまつてゐれば。ぼんとゝ梅奉がはたらきにてねずのばんに金をやり。こよひやり手部やのひくるをあいづにと下さしきへかくしをく。忠兵衛は下さしきくらい所に。つめたいよぎふとんの中へはいり。身をしのびゐる。折からむめ川はさしきのきやくをねどかしてゝとうづのかほでこゝへ來り。

[梅川]さぞきうくつでおざりヒしやう。モシ為はとゞきいしたかへ。[忠兵衛]きのふとゞいてくはしくみた。手前もいよ／＼懐妊にちがひなく。近／＼に引こみ。寮へいつて脱すとのこと。むかしの身なら相談のしやうもあれど。何をいふも金がさきだつ。しつてのとをり勘當の。今の身の上。むかしわすれぬ朋友のよしみにて。少〻づゝの合力でかすかの暮し。はなしにならぬけちなしぎ。[梅川]初におめにかゝつたは忘れもしません。去〻年の三月。それから一夜が二夜とたびかさなり。じれつたいとあひたいといふ癖を心につけてから。とやかくとするうちに。[忠]コレサ愚痴な。今さらそんなとをいつたとつて。借金の云わけにもなるめへ。みゝをだしや。ト何かくなり。[梅川]わたしもとうから其りやうけん。引込で寮へゆけば。ぬしには逢れず。為のたよりもしにくゝなりんす。それにまだきくさへ怖いおろしぐすりとやら。ひよつと死ぬまいものでもおざんせん。よしや身にけがもなく出勤をしてからが。傍衆輩に顔みらるゝもはづかしふおざんす。それに知つておいでなんすとをり。おまへをせいて客衆もきれ。おもだつた馴染もなく。あの八右衛門づらの外は。此ごろの客衆はみな初ばかり。それにつけては。だん／＼たゝまる呉服屋のかり。所／＼のかけとても。つまらぬ譯なれば。[忠]そんなら逃るりやうけんか。[梅川]あたりにきづく。[忠]其りやうけんなりや仕様がある。實はむめ春が此智恵を付てくれた。間ばあしたアノ八右衛門めがしまつて。下の飫へ手めへをつれていくさうだ。おれをせき。てめへに氣をもませたかはり。あいつがおちどになるやうに。いけすからふけるかいゝ。宵に地まはりめらがおれに喧嘩をしかけたが。あれ

も八右衛門めがたのんだに遂はねへ。何かにつけて憎ひやつだ。折よくあすは宵闇なれば。たんぼへ出る庭のうら口。おれはさきへまわつてゐやう。逃さへすればこつちのものだ。折もなく今まではなしもせぬが。こゝからは四里半わきの田舎。二の口村といふ所に。おれが實の親ご孫右衛門どのといふのがある。おちつき所はまづそこサ。

[梅川]そんならァノ。梅春さんもしやうちで。忠にがしてくれる註文で。あの子が胸におさめてゐる。あすの手はづもあの子にきゝや。[梅川]ホンニ梅はるさんは戀しりでおざんすよ。つき出しから。ぬしがせはについてくんなんしてから。わたしが苦勞を身に引うけて。おなじ時に突だしに出た女郎衆より。夜具もはやくしなをして。又内證のせはも早くはなれ。新造出しもはなやかにしてしまひ。つねゞ〳〵も。客衆のもめ。其ほかにちつとも人にひけをとらせず。たいこ持や何やかやにも。切はなれがよいと評判され。着ものゝ摸樣のあんじ迄。人にこれはとほめられるも。みんなぬしのせはゆへでおざんす。わたしが逃たらば。てつきりあとでぬしに疑ひがかゝりんしやう。そればつかりがわたくしや苦勞でおざんす。ト思ひ間より。なき次のおいらんへ。トいはれて。びつくり。[梅春]さつきにからあすこで始終聞ヒした。跡のことはわたしが呑込でおりゐすから。かならずお案じなんすな。ひとまづこゝを立のいて。身二ツになつてから。忠兵衛さんも勘當のおわびをしなんして。おもて向からおいらんの身うけをし。日かげのお身にならぬやう。目出たく女夫におなんなんし。わたくしもかげで祈つておりんすにへ。トいふ折から。ねづのばんハツのひやうし木をうつてまわる。てうちんかた手に茶屋のおとこがさきへ立。はやがへりの客はしごをおりる。此きやくは風流の人とみへ。はしごををりながら即興を口ずさむ。

雞鳴曲

（頭書）
折は よばんのひやうしぎ也

青樓擊柝唱雞鳴
夢裡陽臺雲雨清
唐突佳人彈枕起
無情亦復是多情

客駕はは入つてゐるか。[茶屋男]とうにはいつてをります。

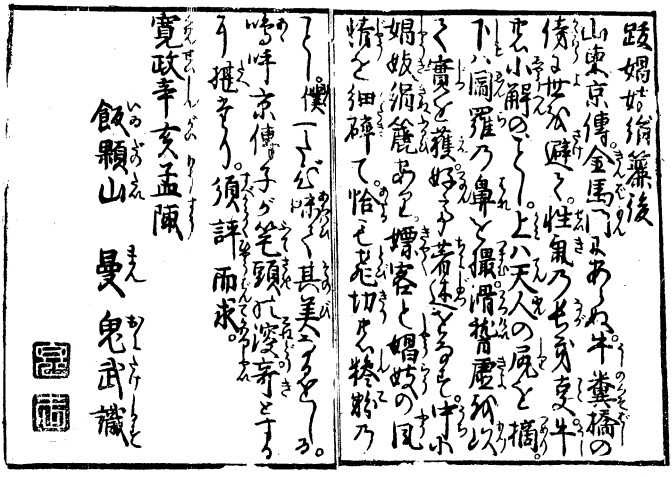
○第三回

金銀をつかふ客にもかまはず横に行は女郎の眞と卵の角道

□世の中は道こそなけれおもひ入る山の奥にも鹿ぞ鳴なる。とはとつと背淺草に鹿茶屋のなき時代の哥なりけり。今繁花のときなれば。鷸鷸もさみしきことをしらず。熊谷の堤で小判をかぞ

へても氣づかひなし。されば人の心もおのづから豁達にて。烟花のにぎはひなどはいふもさらなり。やぼにはあらぬ水戸尻。色と戀との飮の二かい。水の底なる鯉までも。浮れうきたつ大さわぎは。むめ川がけふの客。中の嶋の八右衞門といふは。金銀まん〳〵の金貸にて。女郎のにくがるにくていづら。正めんに大あぐら。八右衞門コウかれ野を見はらした所は。どうもいへぬではねへか。たいこ持。圖子左やうでござります。茶屋てい主袖ふり新ざう こゝは二かいの眺望は妙さ。富士さんがみへんすは。梅川ほんにノウ。トふさいでゐる。女げいしや里吉觀音さんの塔もみへます。八なんだか面白くねへ日だ。圖なせでごせへます。御酒がしみますめへ。サアこれではじめましやう。八いんや。猩〳〵が出番にでやァしめへし。さけばかりもはじまらねへ。茶屋てい主まづおいらんが浮ねへ。ちつとうかし申さうじやァねへか。梅川ちつと心持がわるふおざりいす。番とりしんざら梅奉モシおいらんへ。ちつとうき〳〵しなんしな。こゝがしらけんすにへ。トむめ川にさとられるな。とめくばせする。たいこもち圖モシ一ツおとしばなしがござります。ト袖をひざのうへにのせ。花櫚柾に紫檀棹の三絃が會所の棚にゐて。朋友の象牙の撥にいふにやァ。聞ば三河嶋に湯治ができたさうだ。芝居の三みせんなんざァ。土用休の內いつたといふこつたが。ナントおいらも。いつてみやうじやァねいかと咄す。そばに食客の樫棹犬皮の見世ざみせんが聞てゐて。モシ湯治をなさるなら。わたくしもお供をいたしたうございます。三ツ星の膏藥でも。と角なをりませんというから。紫檀棹がどふした。よこねでも出來たかといへば。鄙三みせんが。ハィちとかの　を痛めましたが。こいつァどうでございます。茶屋てい主おきァかれ。梅奉ばからしいねへ。みな〳〵ヲホ、、、、トほどなく日もくれ燭臺など出しみな〳〵八右衞門がきげんをなほさんとうかしたて。さと吉がめりやす。やみ子がおかし身のおどりなどあつてやゝ時うつる。○かくてむめ川は。忠兵衞がさぞ待どをならんと心せき。ざしきのやうすうかゞひて。はづして出る庭の面。さいはい宵闇折よしと。心はさきへ飛石づたひ。番頭女郎梅春は。萬事に心築山の。うしろにしばし立どまり。梅奉小ごえにてモシおいらん。そのうちかけは人目だつ。わたしが下着の此小袖を。上へきて御出なんし。梅川ホンニにげる今になつてまで此おせは。死んでもわすれはいたしいせん。梅奉ナンノおれいにをよびんしやう。二の日村へ落付たら樣子をくはしゝ。梅川ゑの便で。梅奉かならず待ておりひすにへ。あれ〳〵〳〵おまへさんをよぶのは。たしか八右衞門づらがころでおざんす。みつけ

られては一大事と。梅川が手をとつて足ばやにはしりゆき。庭のしをり戸をしひらけば。さぐりよつて。[忠兵衛]梅川か。[梅川]忠兵衛さんか。トむめ川が思はず聲をはつすれば。そばに本を讀居たる梅はるが。モシおいらん。何をひとりごとおつせへす。と氣をつけられて氣のつくは。夢野の鹿のゆめにはあらで。やはり箕輪の別莊に。寢そびれしまゝ梅川が。とつゝをつゝの胸算用。おもひに迫る此時節。モシこふしてにげたらば。いかゞあらんと心のうちに思ひしは。さだめてかくもあるべしと。推量したる其始終。筆のゆくまゝかきつゞり。色情に終身を謬ともがらの。すこしは戒ともならんかと。鳶の唐丸がもとめにまかせ。紙くずかごよりひろひ出し。そこらこゝらをつゞりあはせて。ついに小冊となし侍りぬ。



跋娼妓絹篩後

山東京傳金馬門にあらぬ牛糞橋の傍に世を避て。性氣の長き戛牛の小解のごし。上は天人の屍を摘。下は閻羅の鼻を撮滑稽虚を以て實を獲。好で著述をなす。中に娼妓絹篩あり。嫖客と娼妓の風情を細碎て。恰も飛切の糝粉のごし。僕一たび味て其美なるをしる。嗚呼京傳子が筆頭の滾奇とするに堪たり。須評而求。

寛政辛亥孟陬

飯顆山　曼鬼武識